

「もてなしの家」

マルコの福音書 1 章 29-31 節

「一行は会堂を出るとすぐに、シモンとアンデレの家に入った。ヤコブとヨハネも一緒であった。シモンの姑が熱を出して横になっていたのを、人々はさっそく、彼女のことをイエスに知らせた。イエスはそばに近寄り、手を取って起こされた。すると熱がひいた。彼女は人々をもてなした。」

本日は献堂 39 周年を記念する礼拝です。上高津の地において、救い主イエス・キリストを土台として、多くの信仰者たちのその信仰によって 39 年間、土浦めぐみ教会が建て上げられ続けてきました。

主なる神様の恵みと、信仰の先輩方の祈りによって、礼拝堂が建てられ、主の恵みに感謝しつつ、礼拝がささげられ続けています。私たちが集うこの礼拝堂に神さまの恵みとこれまでささげられ続けてきた祈りと賛美が満ちあふれています。

そしてまた、土浦めぐみ教会は主なる神様に礼拝をささげるだけでなく、豊かな交わりにあふれています。親子クラスから幼稚科、小学科、ティーンズ、そしてオープン礼拝と様々な礼拝があり、幼子からご高齢の方々まで多くの方々が集っています。各クラスの交わりがあり、お昼には、美味しいめぐみうどん食べながらの交わり、午後には、奉仕者の集まりや、年代ごとの各会の集まり、平日には家庭集会や喜楽希楽会、青年の集まり、最近父親ネットワークもはじまりました。

そして、マナ愛児園、喜楽希楽サービス、森の学園、からしだねの4つの事業もあり、多くの職員と子ども達、ご利用者の方々が土浦めぐみ教会に集っています。

大きな神の家族の豊かな交わりがあります。土浦めぐみ教会は大家族が共に生きる大きな家であるとも言えます。

幼子からご高齢の方々が共に生活をし、そして納骨堂まである大きな家です。

この大きな家はどのような家であったら良いのでしょうか。私たちがこんな家であったら良いと思う家、何よりも主なる神様が願っておられる私たちの家はどのようなものなのでしょうか。

誰々の家と言いますと、建物自体を言い表すこともあれば、その家に住む家族のことを言い表すことがあります。

誰々の家は最近新しく建てられたという風に言うこともあれば、誰々の家はいつも賑やかだというように家族の様子を表わすことがあります。

どちらも大事なことであります。建物自体も、掃除をしたり、メンテナンスをしたり、整えたりして、そこに

住む家族が健康に快適に生活するためには必要なことです。また、お客様を迎えたり、家の中で遊んだり、仕事をしたりと様々な活動をするためにも建物を整えることは必要です。

そしてまた、そこに住む家族が喜んで楽しく一緒に生活しているということも大切です。小さな子どもがいれば育てなければなりません。仕事をして疲れていれば、ゆっくりと休めなければなりません。身体の不自由な者がいれば、環境を整えつつ、助けなければなりません。皆が大事な家族ですから、誰ひとりとして、自分の家にいるにも関わらず、落ち着かない、安心できないというような思いにならないように気をつけなければなりません。

私たちが大きな家に住む、大きな家族として、神様に与えられた建物を大切にしつつ、管理しつつ、家族のために整えつつ、私たち家族が互いに助け合い、一緒に喜んで主を礼拝しつつ、信仰生活共同体として、共に生きていくということを考えてみたいと思います。

まず私たちは、全員が血のつながった家族ではありません。イエス様によって結び合わされた、主にある神の家族です。イエス様は私たちひとりひとりを選び出し、イエス様と共に生きる者へと導いてくださいました。

イエス様がひとりひとりを召し出す場面がマルコの福音書の 1 章に書かれてあります。イエス様はガリラヤ湖のほとりでシモン・ペテロやアンデレたちと出会いました。

マルコの福音書 1 章 16-18 節

「イエスはガリラヤ湖のほとりを通り、シモンとシモンの兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」彼らはすぐに網を捨ててイエスに従った。」

イエス様は、「わたしについて来なさい」ガリラヤ湖で漁をしていた漁師に声をかけます。イエス様からの招きがあり、そして、イエス様の招きに応える、シモンと兄弟のアンデレです。イエス様の声を聞いて応える。それがイエス様の弟子となるということであり、神の家族となるということでもあります。

そのようにして、私たちひとりひとりもイエス様の声を聞いて、その招きに応えて、教会に集う私たちであります。

そして神の家族には役割があります、この世の家族においてもそれぞれに役割があります、父として、母として、子として、兄として、妹として、それだけでなく、家族の中での役割分担があつたりもします。

イエス様は、シモンと兄弟アンデレに言いました。

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」

ただ神の家族になるだけでなく、役割が与えられます。神の家族の一員として生きる使命が与えられる、共に生きるそれぞれの目的が与えられるということです。イエス様に期待をされているということでもあります。

私たちはイエス様に選ばれて、神の家族の一員とされて、それぞれの役割を期待されているということです。そのようにしてイエス様は、ひとりひとりを選び出し、イエス様に従う人々の群れ、共に生きる家族をつくれるのです。

イエス様はこの世の立派な人だけを集めて、この世で活躍するための立派な集団をつくるのではなく、様々な多様な、まさに子どもから高齢者に至るまで、そして様々な賜物を与えられている人を選んで、ひとりひとりそれぞれが違った、豊かな、多様な、そして互いに尊敬し合い、助け合い、そして共に生きる喜びを分かち合うことのできる家族をつくろうとされるのです。

イエス様は、はじめに漁師を弟子として選ばれました。これにも意味があると思います。人々の日常生活に深く結びついた、漁師という働きをしている人を選んだのです。人々の生活から離れた、大きな権力を持った、近づきたい人を選んだのではなく、漁師と言う日常に深く関わる人をイエス様は選ばれました。

イエス様の選びは不思議です。なぜ私が選ばれたのだろうか、なぜ私がここにいるのだろうか、疑問に思うことがあるでしょうか。私たちが不思議に思ったとしても、確かにイエス様は私たちひとりひとりを選んでくださっています。そして、その召しに私たちは応答してここに集っているのです。

そして私たちは共に日常生活を助け合いながら神の家族として生きていくのです。漁師がとった魚を喜んで分かち合うように、私たちは神様からの恵みを喜んで互いに分かち合っていくのです。恵みを分かち合いつつ、ひとりひとりが生き生きと輝き、一緒に生きていく豊かな家族をイメージすることができます。

イエス様との出会いによって、シモンとアンデレは人生が変わりました。新しい生き方へと導かれていきました。誰であっても、イエス様と出会うなら、その人の生き方は、新しく、変わっていくのです。

「わたしについて来なさい」と言われるイエス様に「網を捨てて」ついていくのです。これまでの当たり前の生活を捨てて、イエス様が導かれる新しい生活、神の家族の生活へと導かれていくのです。

聖書を読みますと、イエス様は確かに大工の息子でありましたが、大きな立派な建物を建てるためにこ

の世に来たのではないことがわかります。

漁師たちを「人間をとる漁師」に召し出したイエス様は、人間によって神の家族、教会を建て上げていく大工でありました。

イエス様が一生懸命にされたことは、人を招き、導き、共に生活をし、互いに助け合い、共に信仰を持って生きる共同体をつくることでありました。

そして、イエス様は、みことばによって神の家族を建て上げていきます。弟子たちを召し出したイエス様は、その後、会堂に向かい、みことばを語りました。

マルコの福音書 1 章 21-22 節

「それから、一行はカペナウムに入った。イエスはさっそく、安息日に会堂に入って教えられた。人々はその教えに驚いた。イエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者として教えられたからである。」

人々はイエス様の力強いみことばに驚かされました。そこでイエス様は悪霊につかれた人を癒されました。その場にいた弟子たちも人々も驚きました。ただ語るだけではない、イエス様の力に驚かされたのです。

イエス様は語るだけでなく、みわざによって人々を癒し、励まし、力づけられました。イエス様のみわざが現わされたのは、会堂だけではなく、人々の日常生活の場である家でもイエス様の力が現わされました。

マルコの福音書 1 章 29-31 節

「一行は会堂を出るとすぐに、シモンとアンデレの家に入った。ヤコブとヨハネも一緒であった。シモンの姑が熱を出して横になっていたので、人々はさっそく、彼女のことをイエスに知らせた。イエスはそばに近寄り、手を取って起こされた。すると熱がひいた。彼女は人々をもてなした。」

イエス様はシモンとアンデレの家に行きました。弟子たちはイエス様について行きます。シモンとアンデレの自分の家です。イエス様が自分の家にも入られたのです。イエス様が自分の家にまで来られる。イエス様は自分の生活に深く関わられるお方だと驚いたことでしょう。

そうして自宅において、イエス様の不思議なみわざを見ることになるのです。それは、家族の病の癒しです。シモンとアンデレはイエス様に従いつつ、イエス様と一緒にいながら、病気であった家族が心配で気

になっていたのではないのでしょうか。

イエス様は家族の状況と心配する弟子たちの心を知っておられたのでしょうか。イエス様はイエス様についてくる者たちのことをよく知っておられるお方なのです。私たちがイエス様についていくとき、イエス様は私のすべてをご存じであるのです。弟子たちと家族は、イエス様の慰めを体験いたします。イエス様と共に生きるとき、慰めが溢れている、恵みが満ちているのです。私たちの生活の場でイエス様のあわれみと力が現わされるのです。

イエス様は私たちの日々の生活に入って来てくださるお方です。イエス様を家に迎えた人々は、シモンのしゅうとめが熱を出していることを、「さっそく」伝えたことがあります。

イエス様が来てくださると同時に、さっそく、イエス様に助けを求めた家族がいたのです。私たちもそのような家族でありたいと思います。私たちの家族、そして神の家族の中に苦しんでいる家族、弱さを覚えている家族、助けが必要な家族がいれば、家族のことを心配し、イエス様にすぐに助けを求める、愛のある家族でありたいと思うのです。

イエス様によって癒されたしゅうとめは、人々をもてなしました。その日は安息日、礼拝の日でありました。当時の多くの人々は安息日にはなるべくじっとしている、何もしないという生活をしていました。

しかしイエス様ご自身が、安息日に会堂で教えるだけでなく、悪霊を追い出し、病をいやし、人々を愛し、生かすためのみわざを行われました。

そして癒されたしゅうとめは、人々をもてなすようになるのです。

イエス様がつくられた関係性の中で、人々が変えられていきます。イエス様がきっかけとなって、互いに応答し合う、豊かな関係性がつくられていきます。

私たちもそのようなイエス様との関係性、人との関係性を大事にしたいと思います。イエス様の召しに、すぐに応えた弟子のように。イエス様の声に応答するものでありたいと思います。イエス様が家に来た時に、すぐに家族のことを伝えた人々のように、周りの人々のことを気にかけて、助ける者でありたいと思います。

そして、イエス様に癒されたしゅうとめが、人々をもてなしたように、感謝をもって、助けられるだけでなく助ける者となり、愛されるだけでなく愛する者になりたいと思うのです。そのような関係性が、イエス様によって導かれる神の家族の姿です。

イエス様が人々の生活を変えました。安息日の過ごし方を変えたのです。

礼拝をし、そこに癒しがあり、そして愛のみわぎが行われ、もてなしが行われるのです。

礼拝共同体から信仰生活共同体へ。土浦めぐみ教会の理念でもあります。

それはイエス様がなさろうとした働きでもあります。そして実際に、イエス様によって、互いに助け合う家族、互いに愛し合う家族、互いにもてなしあう家族がつくられていきました。

イエス様はひとりひとりを選び出し、新しい役割を与え、家族を作り、そして人々の常識を超えて、豊かな神の家族の交わりをつくれるお方なのです。

私たちはこの世の常識の中に生きているでしょうか。それとてもイエス様に導かれて新しい神の家族の価値観で生きることができているでしょうか。

私たちがイエス様に導かれて生きるとき、私たちの集まるところが、この世のどんな集まりと比べることもできないほどの、イエス様の恵みがあふれ、主の愛があふれる、もてなしの家となっていくのです。

イエス様は、会堂で多くの人に語るだけでなく、ひとりひとりに関わり、癒しをもたらし、そして一人の人を変える力を持っているのです。そのイエス様の力によって私たちも導かれ、もてなす者へと変えられていきたいと思います。

イエス様が様々なところに出かけていき、会堂でも教えていましたが、イエス様の働きの大事な場所となったのが家でした。

私たちはただ会堂でイエス様のみことばを聞くだけでなく、私たちの神の家族の家にイエス様をお迎えして、イエス様の力強いみわぎを体験しつつ、互いに愛し合い、私たちの家が、たくさんの人をもてなす、もてなしの家とされていくことを求めています。

そのようにして私たちは共に生きる喜びを分かち合うことができるのです。取税人マタイの家もそうでありました。

マルコの福音書 2 章 15 節

「それからイエスは、レビの家で食卓に着かれた。取税人たちや罪人たちも大勢、イエスや弟子たちとともに食卓に着いていた。大勢の人々がいて、イエスに従っていたのである。」

共に集まり、共にイエス様に従う。これ以上の喜びはありません。イエス様によって集められた私たちの集まりは、喜びの家の集まりであり、もてなしの家の集まりであり、イエス様の家族の集まりなのです。共に礼拝をささげ、共に恵みを分かち合う、豊かな神の家族の集まりです。

何度もイエス様は家に行かれます。

マルコの福音書 3 章 20 節

「さて、イエスは家に戻られた。すると群衆が再び集まって来たので、イエスと弟子たちは食事をする暇もなかった。」

人々はイエス様を求めて集まってきます。そして家に集まった人々の前でイエス様は言いました。

マルコの福音書 3 章 33-35 節

「すると、イエスは彼らに答えて「わたしの母、わたしの兄弟とはだれでしょうか」と言われた。そして、ご自分の周りに座っている人たちを見回して言われた。「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟です。だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」

血縁に結ばれた家族のように、神の家族は最初からあるものでも、自然につくられるものではありません。イエス様のみことばによって導かれる特別な家族です。

そして血縁に結ばれた家族であっても、家族であり続けるための努力や工夫が必要なのと同じように、それ以上に、神の家族は、家族であるということを意識しつつ、家族であり続ける努力が必要です。みことばを聞きつつ、みこころを求めつつ、家族の交わりを守り続けることが必要となります。

イエス様はご自身の招きに応えて集まった人々をご自身の家族であると言いました。「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟です。」(34 節)イエス様が主であると告白するその信仰によって家族となっていくのです。

神の家族は、主イエス様に従う者たちの集まりです。そのようにして神のみこころを求めて生きていく者たちの集まりです。神の恵みを共に受ける、分かち合う者たちの集まりです。

「わたしの母、わたしの兄弟とは誰でしょうか。」とイエス様は問われます。神の家族である私たちに向けての大事なイエス様からの問いかけです。私たちは今、神の家族となっているだろうか。共に神のみこころを求めつつ、互いの関係性を大事にしているだろうか。私たちは問い続けたいと思うのです。そして神の家族であり続けたいと思うのです。

私たちは、共に主なる神様の声を聞き、イエス様の招きに応答し、主の癒しのみわざを目の当たりにし、

めぐみを分かち合い、互いにもてなし、仕え合う、めぐみの家族。もてなしの家に住む家族です。

「わたしの母、わたしの兄弟とは誰でしょうか。」と、イエス様は問いながら、ここに集まっている人々が私の家族だと、イエス様は喜んでいましたことでしょう。そして周りの人々も嬉しかったことでしょう。

私たちも同じようにして、私たちの中心にいてくださるイエス様が、ここにいるあなたがたは私の家族であると喜んでいてくださっている。また私たちも喜んで、互いの顔を見つつ、私たちは、この人も、あの人も、私たちの神の家族であるのだと喜びつつ互いに認め合いたいと思います。そして家族として共に生きる、助け合い、励まし合い、もてなしあう関係であり続けたいと思います。

それがイエス様のみこころであり、そのようにイエス様の力で私たちの関係が築かれていくこと、イエス様の恵みに期待したいと思います。

土浦めぐみ教会は豊かな交わりにあふれています。様々な礼拝があり、幼子からご高齢の方々まで多くの方々が集っています。豊かな交わりがあります。4事業の働きもあります。大きな神の家族の豊かな交わり、大家族が共に生きる大きな家です。

私たちの大きな家の中心にイエス様がおられます。そしてイエス様は私たちの家が互いに仕え合う家となり、喜びの家、もてなしの家、となるようにと導いておられます。